

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：37116

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19630

研究課題名（和文）化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活を支援する看護教育プログラムの評価

研究課題名（英文）Evaluation of a nursing education program to support the recuperation life of advanced lung cancer patients undergoing chemotherapy

研究代表者

沖 智子（萩原智子）（Oki, Tomoko）

産業医科大学・産業保健学部・講師

研究者番号：20746549

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活を支援するための看護教育プログラムの確定と評価を目的とした。文献検討およびがん化学療法看護認定看護師による化学療法を継続する進行肺がん患者への治療段階別の看護実践について面接調査を実施し、肺がん化学療法看護に必要なコンピテンシーの洗練化に取り組み、その概要について示唆された。研究参加者数が不足しているため、認定看護師への追加調査等、教育プログラム内容のさらなる探求と有効性の検証が継続課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今後、がん化学療法において熟練した看護実践能力を有する認定看護師による実践内容をふまえて、看護教育プログラムが作成されることにより、近年発展領域にある肺がん化学療法の治療段階に沿った質の高い看護支援が可能となる。また、進行肺がんで化学療法を受ける患者への看護において、質の高い看護職を育成していくことにも貢献できる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to determine and evaluate a nursing education program to support the recuperation of advanced lung cancer patients continuing chemotherapy. A literature review and interview surveys were conducted on nursing practice by certified cancer chemotherapy nursing nurses for each stage of treatment for advanced lung cancer patients continuing chemotherapy, and efforts were made to refine the competencies required for lung cancer chemotherapy nursing, and an outline was suggested. Due to a lack of study participants, further exploration of the content of the educational program and verification of its effectiveness, such as additional surveys of certified nurses, are ongoing challenges.

研究分野：臨床看護学

キーワード：肺がん がん薬物療法 化学療法 がん看護 看護教育

1. 研究開始当初の背景

日本における肺がん死亡率および罹患率は、喫煙者世代の高齢化に伴い増加傾向にあり、2016年の人口動態統計によると、がん死亡原因として男性は第1位、女性は第2位となっている。一方で、肺がんにおける化学療法は2004年の分子標的薬ゲフィチニブ、2015年の免疫チェックポイント阻害薬の導入等飛躍的な進歩によるパラダイムシフトが起こっている。このような治療の進展に伴い、遠隔転移のある進行肺がん患者の5年相対生存率の上昇が認められ、生存期間の延長に寄与しているといえる。肺がん薬物療法の急速な進展に伴い、長期にがん薬物療法を継続しながら療養生活を営む進行肺がん患者が増加することが今後も予測される。

進行肺がんの治療の中心となる化学療法は、延命を目的とし、腫瘍縮小効果の判定結果に沿って、抗がん剤を変更しながら継続する。特に、化学療法を受ける進行肺がん患者の苦痛としては、副作用による身体的影響のみならず、先が見えない不確かさや、常に頭から離れることのない死に対する恐怖が付きまとい、精神的な疲労が蓄積しやすい状況にある（村木明美・大西和子，2006）ことが報告されている。そのため、看護の役割としては、進行肺がん患者で化学療法を受ける患者の治療段階や病気の進行に沿った患者の体験や生活への影響に配慮した支援が重要である。

研究者はこれまでに、2次治療以降の化学療法を受ける進行肺がん患者を対象に、療養生活においてどのような取り組みをしているのか、インタビュー調査を行った（萩原智子，2017）。その結果、進行肺がん患者は、療養生活において、『化学療法や肺がんによる心身への影響に対処する』、『化学療法過程にある自己の理解に努めて治療に参画する』、『周囲の人々とのつながりを維持してソーシャルサポートを得る』、『治療を継続することに肯定的価値を見出す』、『自己に備わる力を駆使する』、『自分らしい生き方を再構築する』ことが明らかになったが、課題として薬剤変更や肺がんそのものの病状変化など治療段階をより具体的に考慮した継続研究を行い、具体的な看護支援について検討していく必要が考えられた。そのため、化学療法継続する進行肺がん患者およびその看護にあたる看護師を対象に治療段階別の困難と対処などについて面接調査を行い、化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活を支援するプログラムの内容を検討することとした（萩原智子，2018）。その結果、プログラムに含むべき内容として、①最新の肺がん化学療法の知識、②AYA世代の肺がん患者が利用できるサポート内容に関する知識、③がん医療を取り巻く社会保障制度、④治療段階別に出現する進行肺がん患者の療養生活上の困難に対する必要な看護支援内容が示唆されたが、近年の肺がん化学療法を取り巻く状況は発展していることを鑑みると、文献検討やエキスパートへの調査、評価指標の検討等、最新の肺がん化学療法の状況に応じた内容に発展させ、有効性の検証を行う必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活を支援する看護教育プログラムを作成し有効性を検証することである。最新の肺がん化学療法看護に関する動向やがん化学療法看護認定看護師による化学療法を継続する進行肺がん患者への治療段階別の看護実践の実際を明らかにし、肺がん化学療法看護に必要なコンピテンシーの洗練化をはかり、看護教育プログラムの確定、評価指標の検討および有効性の検証をめざす。

3. 研究の方法

(1) がん薬物療法を受ける進行肺がん患者の看護に関する国内研究の動向

①方法：文献研究

②文献の選定と分析：文献データベースは、医中誌Webを用いた。対象年は、免疫チェックポイント阻害薬が承認された2015年12月以降とした。分析は、著者、発表年、研究目的、研究デザイン、治療方法、治療段階、結果の概要、看護支援への示唆についてレビューシートを作成した。研究内容は、研究目的および結果の概要から明らかになった研究内容について意味内容を損なわないように一文に表し、内容の類似性により分類した。

(2) 化学療法を継続する進行肺がん患者に対するがん化学療法看護認定看護師による看護実践の実態に関する調査研究

①方法：半構造的面接調査

②研究対象者：肺がん化学療法を受ける患者の看護実践経験のあるがん化学療法看護認定看護師

③調査内容：肺がん化学療法を受ける患者に対する看護における治療段階（1次治療・2次治療・3次治療以降）別に看護実践内容などをインタビューガイドに基づき調査した。また、研究対象者の基礎情報として、看護実践における経験年数等を調査した。

④分析方法：逐語録を作成し、看護実践の内容に関する記述を抽出し、個人コードとした。その後、類似性に沿ってサブカテゴリ、カテゴリ化した。

⑤倫理的配慮：研究者の所属する大学および共同研究者の所属施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

(3) 化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活を支援するための看護プログラムの確定と評価の検討

(1)(2)に基づき、看護教育プログラムに必要なコンピテンシーを洗練化し、プログラム確定後、実施および評価を行う。

4. 研究成果

(1) がん薬物療法を受ける進行肺がん患者の看護に関する国内研究の動向

①対象文献の概要

文献検索の結果48件が抽出され、選定条件に合致する11件が対象論文となった。研究デザインは、質的研究10件、介入研究1件であった。治療法は、化学放射線療法2件、細胞障害性抗がん薬による治療3件、細胞障害性抗がん薬または分子標的薬による治療1件、化学療法(詳細記載なし)4件、化学放射線療法または化学療法1件であった。

②がん薬物療法を受ける進行肺がん患者の看護に関する研究内容の動向

研究内容は、【病気やがん薬物療法に伴う体験】、【療養生活における取り組み】、【治療への思いや生きる力】、【緩和ケア介入プログラムの検証】に分類され、患者の体験、療養生活の取り組みに関する研究が11件中7件を占めていた。その内容として、患者は進行肺がんの病態の特徴から死や不確かな予後についての意識があり、それらと共存しながら治療を継続している体験や取り組みが見出されており、看護実践としては、進行肺がんのプロセスに寄り添うことやセルフケアの習得を促すこと、意思決定支援や自分らしく生きる支援の重要性等が示唆されていた。特に、セルフケアや治療を継続する中での取り組みに関して、新規薬剤やレジメンの導入が過渡期にある肺がん領域においては、その薬剤の特徴や有害事象を踏まえた看護支援が重要と考える。

(2) 化学療法を継続する進行肺がん患者に対するがん化学療法看護認定看護師による看護実践の実態

①研究参加者の概要

研究参加者はがん化学療法看護認定看護師5名で、看護師経験年数は18~35年(平均25.4年)、認定看護師取得後の経験年数は13~18年(平均14.6年)、肺がん看護経験年数は8~16年(平均12年)、病棟・がん看護外来兼務1名、病棟1名、化学療法室3名であった。

②化学療法を継続する進行肺がん患者に対するがん化学療法看護認定看護師による治療段階別の看護実践内容とその特徴

化学療法を継続する進行肺がん患者に対するがん化学療法看護認定看護師の看護実践として、1次治療では【治療目的の理解度を確認する】【病気の受容過程を支える】【患者のサポート状況を情報収集する】【がん薬物療法の副作用を説明する】【初回投与の経験をもとにセルフマネジメント支援をする】【外来治療への移行を支援する】【副作用への対応の振り返りをする】が明らかになった。2次治療では、【病気の進行や治療の影響について情報収集する】【薬剤変更の思いを語るができるよう支援する】【治療体験に沿ったセルフマネジメント支援を行う】【治療を継続する力を患者と共に模索する】【患者の状況を多職種と共通理解できるように努める】【喫煙する患者の行動を受け止める】が明らかになった。3次治療以降では、【治療継続が難しい時期に近づく可能性を見据えた情報収集をする】【患者自身が治療継続の意味を考える支援をする】【治療継続に揺れを感じる患者の意思決定を支える】【病気の進行に応じて専門家と連携する】【長期の治療や病気の進行に配慮した治療環境を提供する】【病状進行を予測したACPや家族へのケアを行う】が明らかになった。治療段階に特定せず実践している看護実践では、【患者が相談しやすいよき理解者となる】【副作用の早期発見に向けた支援をする】【生活を主体にしたセルフマネジメント支援を行う】【最新の肺がん薬物療法の情報を主体的に得る】【よりよい治療環境となるための支援をする】が明らかになった。

看護実践の特徴として、1次治療において、先行研究(網島ひづる他, 2004)では、初回治療を受ける肺がん患者への看護支援として、家族を含めた援助、化学療法の副作用対策などの看護介入が必要であることが示唆されており、本研究でも【がん薬物療法の副作用を説明する】ことがなされていた。副作用の説明はセルフマネジメント教育の一環であり、認定看護師は初回治療のなかでも【初回投与の経験をもとにセルフマネジメント支援をする】という初回治療をクールごとに細分化してケアを発展させていた。さらに本研究では、告知後の初回治療までの期間を考慮し、【病気の受容過程を支える】という精神的支援をしつつ、【治療目的の理解度を確認する】ことで、進行肺がんと診断された場合の治療の目的は完治ではなく延命を目的としている現実を患者自身がどのように理解しているのかを知り、治療目的を患者と医療者が共通理解したうえで治療過程を支える基盤を整えていることが抽出された。また【副作用への対応の振り返りをする】は、次のクールの治療をより安全に実施するための認定看護師の指導的な役割が遂行されていたと考える。

2次治療では【病気の進行や治療の影響について情報収集する】という1次治療や病気の影響を知り、バッドニュースを体験した患者に対して【薬剤変更の思いを語るができるよう支援する】ことで、患者の体験の理解が深まり、治療継続の意思や患者の思いに沿った看護支援につなげる実践となっていた。【治療体験に沿ったセルフマネジメント支援を行う】【治療を継続する力を患者と共に模索する】については、2次治療が無効の場合、全身状態や病態により3次治療

の選択肢も十分に臨むことができる段階であることから、患者の QOL を維持しながら患者が治療を前向きに継続する支援をしていると考える。

3 次治療では【治療継続が難しい時期に近づく可能性を見据えた情報収集をする】【患者自身が治療継続の意味を考える支援をする】【治療継続に揺れを感じる患者の意思決定を支える】という治療継続の難しさを感じる患者の意思決定を支えていくための支援プロセスが明らかになった。治療を継続している場合も長期の治療による身体への影響があったとしてもなるべく安楽に実施できる方法を模索し【長期の治療や病気の進行に配慮した治療環境を提供する】看護や【病気の進行に応じて専門家と連携する】【病状進行を予測した ACP や家族へのケアを行う】では治療継続の有無について患者の考えを気にかけて、社会資源の活用や緩和ケアについて専門家と連携をとる、病気の進行に伴う身体症状や ACP に向けた支援を行う等、患者の意思の尊重や安楽に日常生活を送ることができるための支援を同時並行で実践されていた。治療継続の有無にとらわれず、冷静に患者の状況をアセスメントし、必要なケアを判断していたと考える。

治療段階に特定せずに実践している看護実践では、【患者が相談しやすいよき理解者となる】ことで不安や疑問を抱く患者の支えとなり安心して療養できる環境を提供していた。【副作用の早期発見に向けた支援をする】【生活を主体にしたセルフマネジメント支援を行う】は、安全に治療を継続し、さらに患者の生活を大切に QOL の維持向上に向けた支援は生活を支える看護職の役割のひとつであることから、常にその視点を大切に実践していることが考えられた。また、【最新の肺がん薬物療法の情報を主体的に得る】では肺がん薬物療法は飛躍的に発展しており、がん薬物療法のレジメンは多岐にわたる。特に免疫チェックポイント阻害薬の副作用は複雑であり、その管理や対処方法を模索している現状がある。日々進展する最新の情報を主体的に得る努力は、情報を得て実践に活用するという目的を理解した行動と考えられる。進行肺がん患者に関わる準備姿勢としての行動であり、認定看護師としての役割意識と自らの能力を高める行動と考えられる。本研究は参加者 5 名の分析であり、偏りが生じている可能性があり、課題がある。今後は追加調査をすすめ、さらなる探求を目指し、研究プロセスを継続する。

(3) 化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活を支援するための看護プログラムの確定に向けた検討

化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活を支援するための看護プログラムの確定に向けて、文献検討および認定看護師による実践内容の現段階における調査結果をもとに、先行研究(萩原智子, 2018)により示唆された肺がん化学療法看護に含むべき内容からコンピテンシーを洗練化し、今後の方向性を検討する必要がある。本研究では、文献研究からは、看護実践として、進行肺がんのプロセスに寄り添うことやセルフケアの習得を促すこと、意思決定支援や自分らしく生きる支援の重要性等が示唆されていた。特に、セルフケアや治療を継続する中での取り組みに関して、新規薬剤やレジメンの導入が過渡期にある肺がん領域においては、その薬剤の特徴や有害事象を踏まえた看護支援の重要性が見出された。がん化学療法認定看護師による看護実践の調査では、1 次治療、2 次治療、3 次治療以降の治療の特徴や位置づけ、病態の進行状況を的確に捉え、各治療段階に応じた看護実践がなされていた。また、治療段階に関わらず実践している内容としては、患者が相談しやすい姿勢をもち理解者になるという看護者としての態度や患者の生活を基盤にしたセルフマネジメント支援、複雑化する肺がん薬物療法の知識を主体的に得る努力をする等、職業倫理や看護職の役割を実践に落とし込む具体的行動が基盤となっており、各治療段階の特徴に加え、肺がん化学療法を受ける患者への看護を実践する際の基本姿勢として学習内容に盛り込む必要性が考えられた。

これらのことから、化学療法を継続する進行肺がんの療養生活を支援するために必要な看護のコンピテンシーと概要は、①最新の肺がん化学療法における医学的知識(肺がんの病態生理、進行肺がんにおける化学療法の種類と有害事象の特徴)、②治療段階別に出現する進行肺がん患者の療養生活上の困難、③治療段階別の看護の方法(1 次治療、2 次治療、3 次治療以降という治療段階に沿った看護の方法)、④看護専門職者の役割に基づいた姿勢(セルフマネジメント支援の考え方、複雑化する肺がん化学療法の知識の習得に向けた行動、看護専門職者としての態度や姿勢)、⑤がん医療に関連する社会保障制度が示唆された。今後はがん化学療法認定看護師への追加調査をすすめ、プログラムの確定および評価に向けてさらに探求していく必要がある。

<引用文献>

村木明美, 大西和子(2006). 外来化学療法を受けている非小細胞肺がん患者の苦痛に関する研究, 三重看護学誌, 8, 33-41.

萩原智子(2017). 2 次治療以降の化学療法を継続している進行肺がん患者の療養生活における主体的取り組み, 日本がん看護学誌, 31 (1), 31-37.

萩原智子(2018). 化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活支援プログラムの開発, 科学研究費助成事業研究成果報告書.

網島ひづる, 高見沢恵美子, 小島操子(2004). 化学療法を初めて受ける肺がん患者の治療前および治療中のコーピングとその比較, 18 (1), 25-35.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 沖智子、国府浩子	4. 巻 20
2. 論文標題 がん薬物療法を受ける進行肺がん患者の看護に関する国内研究の動向	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 熊本大学医学部保健学科紀要	6. 最初と最後の頁 79-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 沖智子、国府浩子
2. 発表標題 がん薬物療法を受ける進行肺がん患者の看護に関する研究の動向と課題
3. 学会等名 第38回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------